お宮参りのしおり

《お宮参りの由来》

――お参り風景――

お宮参りは古来、「産土詣(うぶすな)り」と呼ばれ、子供の誕生を産土の神に感謝し、その子の成長を祈願したという故事に由来しています。

今日のように「お宮参り」という呼称が用いられたのは、室町時代（足利義満の時代）からといわれ、当時は色直し（お産のあと日常生活にもどる）のあとの吉日を選び母子そろってその家の氏神様に詣り、子供の氏子入りをすませたあと部屋にも飾りをつけて産土の神をおまつりしていたようです。

江戸時代（徳川家綱の時代）には、お宮参りの帰途に大老・井伊掃部頭(いいかもん)宅へ挨拶に立ち寄る風習が生まれ、それ以来庶民の間でもこれに習って親類や知人宅へお宮参りの報告と挨拶に伺う習慣が各地に広まりました。

こうしたお宮参りの風習やしきたりは、その後も大切に受け継がれ、今でも当時の名残を残し、おめでたい家庭の歳事として全国各地で行われています。

《お宮参りの時期と祝い方》

お宮参りは通常男児は生後３０日目か３１日目、女児は３１日目か３２日目に行うのが定説とされています。しかし地方によっては男児が５０日目、女児が５１日目のところや男女とも１００日目のところもあります。時期や日時はあまり古式にこだわらず，これはひとつの地方的なしきたりと考えていいでしょう。

昨今では子供の体調や気候を考え合わせてお参りするケースが多くなっています。また、お参りする場所もその家の氏神様や有名神社にこだわらず、最寄りの神社や近くの守護神にお参りされているご家庭もあります。

《お祝着の着せ方とお宮参りの仕方》

お宮参りの祝い着は、一般に「のしめ」と呼ばれ、男児には定紋を５つ入れた祝い着、女児には絵羽模様の祝い着が多く用いられます。

着せ方は祝い着を広げて子供の背中をおおうように掛け、紐の一方を肩側に、他方を脇から通し背中で蝶結びします。

通常は祖母か近親の女性が子供を抱くものとされていますが、これは、産後の母体をきづかってのことと、お産を忌む風習の名残りで子供を潔めるために母親以外の女性が抱いてお参りしたものと考えられます。しかし、ご夫婦でお参りされる場合はやはりお母さんが抱かれるのが自然でしょう。

また、付き添いの人の装いは、きものの場合は訪問着、付下げ、色無地など伝統的な儀式にふさわしい装いがよいでしょう。

神社や氏神様の神前で揃って祈願するだけでもかまいませんが、丁寧にされる場合は、社務所に申し出て、神官のお祓いを受け祝詞をあげてもらいます。その場合のお礼には、のし袋か封筒に表書きを「御初穂料」または「御玉串料」と書き添えて渡します。

――附属品のつけ方と扇子の奉納――

幼い子の健やかな成長を祈る――――――お宮参り。
そこには時代を超えたあたたかい愛の姿があります。
いつまでも大切に伝えたいものです。

武　田
群馬県藤岡市藤岡 114
電話 0274-22-0202 ㈹